

新潟) 県外出身の学生を支援 長岡の若手企業家

新型コロナウイルス

伊丹和弘 2020年5月3日 11時00分



お米などの食料品を受け取る学生たち=2日、新潟県長岡市千秋3丁目のハイブ長岡



新潟県長岡市の若手企業家たちが、県外から来て市内で暮らす学生たちを支援しようと2日、お米などの食料品を希望する人に手渡した。コロナ禍のなか、地元産品を県外の市出身者に送る活動が増えるなかで、足元の若者にも支援の輪を広げようと長岡青年会議所が企画した。

発案したのは市内で飲食店などを営む和田桂佑さん(34)。学生15人を雇っていた二つの飲食店は閉店中。「彼らはバイト代を生活費に充てていた。同じく困っている学生は長岡にたくさんいるはず」。1日夜に仲間と一緒に支援のための食品セットを準備した。

和田さん自身も苦しむ。新型コロナの影響で2店の休業に加え、主力である本店の結婚式は半数が延期、残りがキャンセルに。社員食堂を料理人と2人で切り盛りし、なんとか食いつないでいるという。「どうなったら緊急事態宣言が解除され、元通りに営業できるのか。基準となる数値などが示されないままにどんどん期間だけが延長されて、先が見えない」

市内の長岡技術科学大は全国から高専生が進学。長岡造形大は公立化以降、県外者が増え、今年の新入生は8割を超えた。「長岡出身の県外学生には支援があるのに、長岡に今いる学生への支援がない。自分たちでやるしかないと思った」

支援の食材は仲間呼びかけて集めた。お米5合、ソーセージ2本、コンニャク450グラム、マフィンなどを手提げバッグに入れて100セット。ツイッターやフェイスブックで告知し、希望者を募った。

この日、会場となったコンベンション施設「ハイブ長岡」では消毒液を置き、人と人の距離を十分空けるなど感染防止に努めた。受け渡し場所にも透明シートを張った。正午からの開始だったが、希望者の列は施設を半周し、約20分後には予定の100人に達した。

受け取った長岡造形大2年の男子学生(19)は仙台市出身。「地元の方がコロナ感染者が多く帰るに帰れない」。授業費や下宿費は両親に出してもらっているが、食費などはリサイクル店でのアルバイト代月5万~6万円から捻出。4月はシフトも減り、収入は3万~4万円。5月以降はさらに減るのではと危惧する。「そんな中、こういう支援は本当にありがたいし、うれしい。長岡が少し好きになった」

長岡青年会議所では、並んだ学生たちにアンケートを実施。今後の支援につなげる。配布した100人に加えさらに約50人来場したが、配れなかった。同会議所まちづくり委員長の兼古健太さん(36)は「県外から来て困っている若者が僕らの足元にこれだけいる。長岡に自分のことを思ってくれる人がいると伝わったならうれしい。協賛企業を増やし支援を広げ、継続したい」と語った。(伊丹和弘)